

「代替医療」あるいは「栄養生化学療法」を考えるにあたって・・・

「汝の食物を汝の医薬とせよ、汝の医薬は食物とせよ」

有名な、ヒポクラテスの言葉です。

アメリカでは「代替医療」・・・「栄養生化学療法」の普及は目覚ましく、多くのクリニックで採用されているし、医学部のカリキュラムでも「必須科目」としている大学も数多く出てきている。

しかし、その道のりは決して「平坦」ではありませんでした。

多くの「先端医学」を学ぶ医師からは「化学的根拠に乏しい」とかのバッシングを浴び、「医療機器メーカー」や「製薬会社」からも、大きな攻撃がありました。

当然ながら、政府も一部の人間を除き「そんな、医学は医学とは呼ばない」と言われ、「栄養生化学療法」を行う医師は、犯罪者扱いまでされました。

しかし、今では「第三の医学」とまで呼ばれるまでに至りました。

昔の医療は「総合医」と言われ、次に「専門医」に移行していきました。

一時期、(時折今でも) 専門医は総合医を見下し、総合医の数が減少してきました。

総合医も又、専門医の資格認定を受けるべく、方向転換をしてきました。

今、日本ではこの状況下にあります。

何年も前から日本でも「予防医学」の時代が来る。と認識していたにもかかわらず、今だそれらの医療に医師が興味を抱き、勉強する事はありません。

製薬会社は日夜新薬の開発に資金を投入し、医療機器メーカーも最先端の医療機器の開発に力を注いでいます。

これらの、行動は決して間違った事ではないと思いますが、先端医学では解決できない「疾患」がある事に、真正面から向き合わず、避けて通っている事も事実です。

あきらかに「メタボリック症候群」は、生活環境によるものだ！と声高らかに謳いながら、医学会では、それらの「栄養生化学療法」の「研修検討会」は行われません。

アメリカと日本と保険制度の違いからか、この「栄養生化学療法」だけは、「まゆつばもの」として扱われます。

もう数年前から、アメリカ人は「自分の健康について責任をもつのは自分自身だ！と言う認識が芽生え」額に汗流して手にした報酬が、医療費として際限なく流れてしまう事にうんざりしていたのです。

国民の健康意識は、大きく変わり、病気予防への関心が高く、「無添加」「無糖」「減塩」「100%オーガニック」「カフェイン抜き」と言ったラベルの製品が、スーパーには所狭しと並んでいます。

製薬会社も、医師や一般消費者向けに「ビタミンの情報」提供に乗り出し、企業の経営者たちも、トレンドに乗り遅れまいと、会社の施設内にジョギング用のトラックや、トレーニングマシンを用意し、食堂にはサラダバーを設けています。

又、従業員対象に「ストレスマネジメント」や「エアロビ」「ダイエットプログラム」を導入する企業も増えてきています。

近年では、大学のカリキュラムでも病気の治療より予防に重点が置かれ、講義が増えてきています。

どんなテーマ？かと言うと

「必須脂肪酸に関して」「血小板と栄養素」「自己免疫症とガン、心疾患、老化への栄養素の影響」「人の行動性と栄養との関係」などです。

しかも、有名な「マサチューセッツ工科大学」で行われたのです。

アメリカではすでに、変化をしています。

政府も多くの奨励金を出しています。

当然、その背景には「増大する医療費の削減」があったのも確かです。

2度のノーベル賞を受賞した、ライナス・ポーリング博士は、「栄養素とガン」に関する研究への資金援助を7回拒否されたが、8回目に合衆国政府から、莫大な援助を獲得しました。

今や、本当の意味において「予防」を考える時なのかも分かりません・・・日本も・・・

事実、製薬会社は大きな声では言っていませんが・・・

画期的な新薬！と言った薬の中身が、数種類の栄養素を単純にミックスしただけに過ぎない薬品が、数多くあるのも見逃してはいけません。

知らないのは、置き去りにされているのは、実は国民だけなのかも分かりません。

もしかしたら、そのうちどこの「クリニックの受付カウンター」の傍らにも、「サプリメントコーナー」が出来て、処方料+診断料+サプリメント代金・・・という形で、新たな展開が起こるのかも、分からない・・・